

さかな
しろ
白い魚と
サメの子



え
絵・ほった
堀田アツコ



白^{しろ}い魚^{さかな}とサメの子^こ

1

実演^{じっえん}ノート

広^{ひろ}い 広^{ひろ}い 海^{うみ}の
あるところに
白^{しろ}い魚^{さかな}が いました。

白^{しろ}い魚^{さかな}は ほかの魚^{さかな}にくらべて
泳^{およ}ぐのが おそく
カラフルでもなく
話^{はなし}をするのも 苦^{にが}手^てでした。

そして
いつも ほかの魚^{さかな}たちから
いじめられていました。

泳^{およ}ぐのが速^{はや}い魚^{さかな}
「おまえなんか
あつちに行^いけ！」

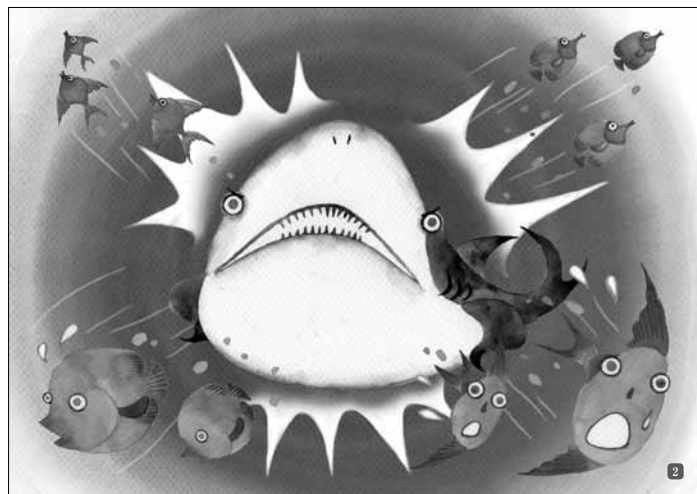
カラフルな魚^{さかな}

「わたしたちに ちかよらないでっ」
いじめられるのが いやで
かくれてばかりの 白^{しろ}い魚^{さかな}は
いつも
ひとりぼっちでした。

からかうように

本^{ほん}気^きでいやがるように





2

ある日のこと。

あばれんぼうの
サメの子どもがやってきました。

サメの子ども

「おながす
いてるんだよ！
おいしい魚は
どこにいる？」

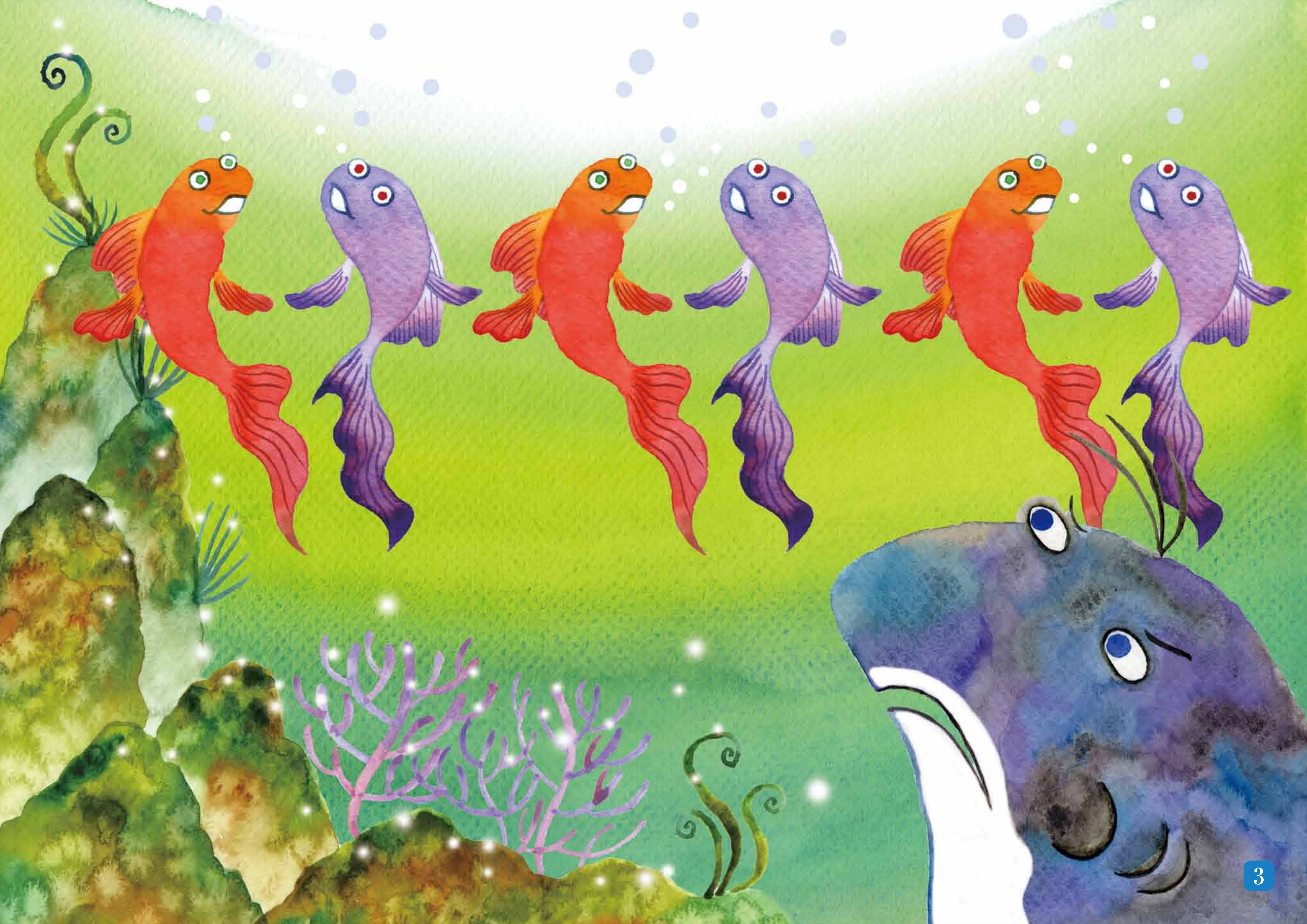
泳ぐのが
速い魚たちは
みんな
いっせいに
にげました。

そこで
次に
サメが
向かったのは

—速くぬく—

実演ノート

えいごうに
いびつて



3

カラフルな魚たちが
集まる場所でした。

カラフルな魚たちは
力を合わせ

それは それは
美しい ダンスを
サメの子どもに 見せました。

サメの子ども

「こんなにキレイで
ダンスも うまいとなると
きっと人気者だぞ…。

人気者に きらわれると
みんなにも ぼくは
きらわれてしまうかも。

ここは そっと しておこう」

サメの子は しずかに
その場を 去りました。

実演ノート

心の中で

つぶやくように





4

サメの子^こが 次^{つぎ}に
たどりついた場所^{ばしょ}には
話^{はなし}じょうずな魚^{さかな}たちが
集^{あつ}まっていました。

話^{はなし}じょうずな魚^{さかな}たちは
サメの子^こを かこんで
次^{つぎ}から 次^{つぎ}へと
おもしろい話^{はなし}や
ためになる話^{はなし}を しました。

サメの子^こども

「この頭^{あたま}のいい魚^{さかな}たちは
ぼくが こまったときに
きつと役^{やく}に立^たつぞ。

今日^{きょう}は
食^たべないで置いてやろう」

実演^{じつえん}ノート

するがしんごうに





5

サメの子は
うろうろ泳ぐうちに
おなが すきすぎて
イライラしてきました。

サメの子ども

「まったく！

今日の ぼくの ごちそうは
いったい どこにいるんだ！」

そう言いながら

岩のかけや

サンゴの すきまを

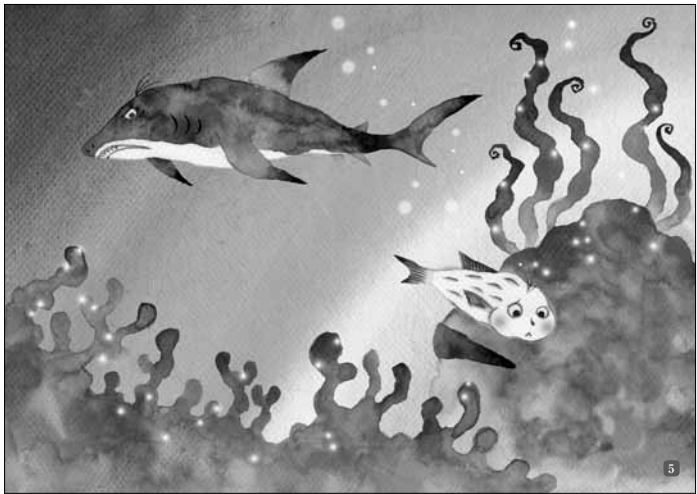
のぞいてまわると

遠くに白い魚を見つけました。

— ゆっくりぬく —

実演ノート

イライラしたくちで







6

実演ノート

何も知らない 白い魚は
自分が知っている
かくれがを
てんと いろいろな
ふと 思いました。

白い魚

「ぼくは

みんなに きらわれているんだ。
ぼくなんて
いなくなってもいい…。

サメに
食べられちゃっても いいかな」

力なく さびしそくに

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！

かいとうれい
回答例

いなくなつてはいけない。
命は平等だから。それぞれに家族がいるから。

いなくなつてもいい魚(人)は、本当にいると思いますか？
また、それはどうしてですか？



7

すると そこに 白い魚の
お母さんが やってきました。

白い魚のお母さん

「こんなところで
何をしているの！
サメにでも見つかったら
どうするつもり！」

白い魚

「ぼくなんか
サメに見つかればいいんだよ。
食べられちゃえば
もう いじめられないし
ひとりぼっちで
さびしくなることも
ないから…」

実演ノート

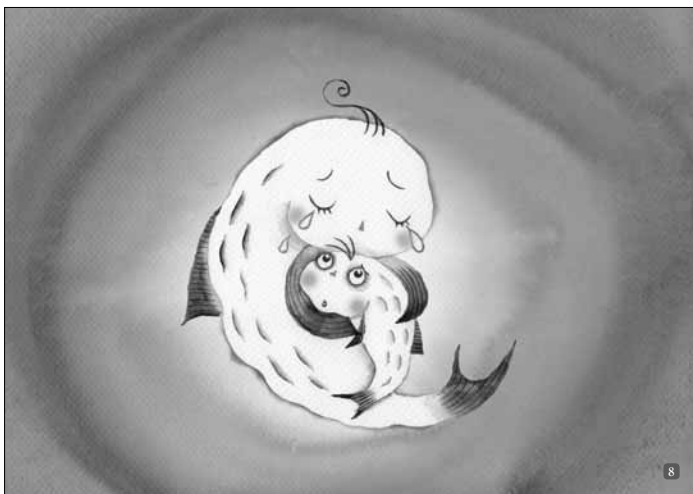
心配で

おいつくさぬように

泣きそうな声で







白い魚のお母さんは
そのときに はじめて
自分の 子どもが
いじめられていることを
知ったのでした。
そして シクシク なきました。

白い魚のお母さん

「気づいてあげられなくて
ごめんね。
でも 食べられてもいいなんて
言わないで」

白い魚は はっとしました。

「あなたが 食べられたら…
悲しくて 悲しくて
海の水が お母さんのなみだで
あふれてしまうくらい
ないてしまうわ」

白い魚は お母さんが なくのを
はじめて 見ました。

白い魚のお母さんは、
どうして泣いたのでしょうか？

かいとうれい
回答例

愛する子どもが、死にたいと思う
くらい悩んでいたことを知り、か
わいそうに思ったから。
自分の子どもことなのに、気づ
いてあげられず、反省したから。

かいとうれい
回答例

家族。友達。先生。

みなさんは、
悩み事をだれに
相談しますか？
(だれかに相談できますか？)

泣いているときに
話すように
とぎれ とぎれで



しろさかな
白い魚

「ぼく お母さんが そんなに
悲しむなんて 知らなかった。
食べられてもいいなんて
もう言わない」

しゅんぽりしながら

すると お母さんは 言いました。

しろさかな
白い魚のお母さん

「よく聞いて。

言い聞かせるうちに

どんなに つらい目に あっても
自分から 食べられてもいいなんて
考えちゃ ぜったいにダメ。
命は とても
大切なもののなのよ」

その会話を こっそりと
聞いていたサメの子は
なぜか泣いていました。
そして
その場を 去って行きました。

―次ページを右にひいてみて―

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！

かいとうれい
回答例

命はたった一つしかない、
かけがえのないものだから。

かいとうれい
回答例

白い魚のことが、
かわいそうになったから。

なぜ、命は
大切なのだと思いますか？

白い魚の親子の会話を
聞いていたサメの子が、
こっそりと泣いたのはなぜでしょう？





白い魚は 考えました。

「お母さんを

悲しませないようにしなきゃ。

ぼくもみんなと同じになれるように

今日から がんばろう！」

そう考えた白い魚は

速く泳げるように

練習を したり

―― 3分の1ぬく――

カラフルになれるように

ひろった貝がらを

自分の 体には 試してみたり

―― ゆっくり全部ぬく――

話じょうずになるように

いろいろな本を 読みました。

白い魚は、始め、どうすれば

友達ができると思っていたのでしょっつ？

回答例

他の魚と同じ特技を持ったり、同じ見た目になれば、
友達になってももらえると思っていた。

よ 読んだあとに
かんが 考えよう！





11

でも…。

白い魚は
やっぱり

ひとりぼっちのままでした。

白い魚

「がんばっても

がんばっても

やっぱり

ぼくは みんなと 同じには

なれないんだ…」

白い魚は

くやしい気持ちと

悲しい気持ちで

むねが いっぱいになり

声をあげてなきました。

そして

自分の かくれがに

とじこもり

いつのまにか

なきつかれて

ねむってしまった。

実演ノート

くやし泣きを

こぼせるように





12

ねむっている 白い魚の
ゆめの中に まぶしく 光る
大きなリュウが あらわれました。

リュウ

「なかまに なるということとは
なかまと 同じになること
じゃないんだ。

ありのままの 君を
すきになってくれるのが
本当のなかまというものだ。

自分らしさを 大切にしなさい。

君にも いいところは
たくさんある。

でも かくれてばかりいたら
君の いいところは
ほかの 魚に見てもらえないぞ」

そう言うと リュウは スーツと
消えてしまいました。

実演ノート

しずかに おちついて
おとすように

よ 読んだあとに
かんが 考えよう！

かいとうれい
回答例

自分らしさが大切だということ。
かくれてばかりいるのは良くないということ。

大きなリュウが、白い魚に伝えたかったことを
簡単に言うと、どんなことでしょう？





13

白い魚が めざめると

そこには

ピカピカに光る

リュウのながーいながーい

ヒゲが一本 ありました。

白い魚は

その光るヒゲを

クルクルとロープのように まいて

かくれがの すみに

大切に しまい

家に 帰りました。

実演ノート





14

実演ノート

白い魚は お母さんに
聞きました。

白い魚

「お母さん

ぼくの『自分らしさ』って
何だと思う？」

白い魚のお母さん

「そうねえ

『これだけは 負けない！』
って思えるものを
見つけてごらんさい」

しばらく 考えてから
白い魚は言いました。

白い魚

「そんなもの…

ぼくには ない…。

ぼくは 泳ぐのも おそいし
色も キレイじゃないし
お話も じょうずじゃ
ないんだもん…」

みなさんの

『自分らしさ』

（『これだけは 負けない！』
というものを
1つ考えてみましょう。

ポイント

高学年になるほど、
自分の長所は発言しづらいものです。
隣の人の、「良いところ」を
発表してもらうのも良いですよ。

少し困ったように

やさしく ゆっくりと

しよとほりとして

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！





白い魚は
毎日 かくれがへ 行つて
『自分らしさ』について
考えていました。

そんなある日。
遠くから

話じようずな魚

「た、助けてー！」

泳ぐのが速い魚

「流されるー、

だ、だれかーっ！」

と 悲鳴のような声が
聞こえてきました。

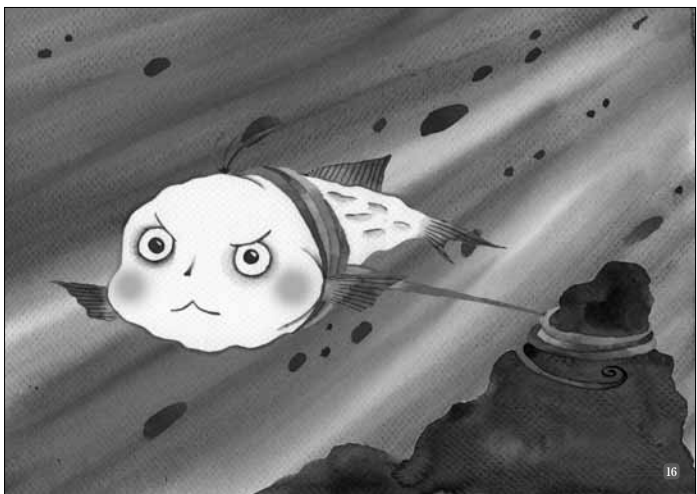
かくれがから 外をのぞくと
海のそこにある
すなが まいあがり
まるで 夜のように
真っ暗になっていました。

とつぜん あらしが
やってきたのです。

あせつてくぬちうに

こわがつてくぬちうに





16

白い魚は 始め かくれがで
ジッとしていました。

でも
何度も

「助けて！」
という声を 聞くと
ジッとしていることが
できませんでした。

白い魚は
光るリュウのヒゲを とりだし
かたほうを 岩にくくりつけ
もうかたほうを
自分の体にまきつけて
あれくるう
真っ暗な海へと
とび出して行きました。

実演ノート

意を決したように
力強く





リュウがおいていった
ヒゲがキラキラ光るので
白い魚の体も
キラキラと かがやき
暗い海を
てらすことができました。

その明かりを 目じるしに
ほかの魚たちが
集まってきました。

カラフルな魚

「真っ暗で
どこへ向かって 泳げばいいか
わからないの」

サメの子

「こんなに 流れが 速い海は
はじめてだ…」

話しようずな魚

「おねがいだ、助けてくれ」

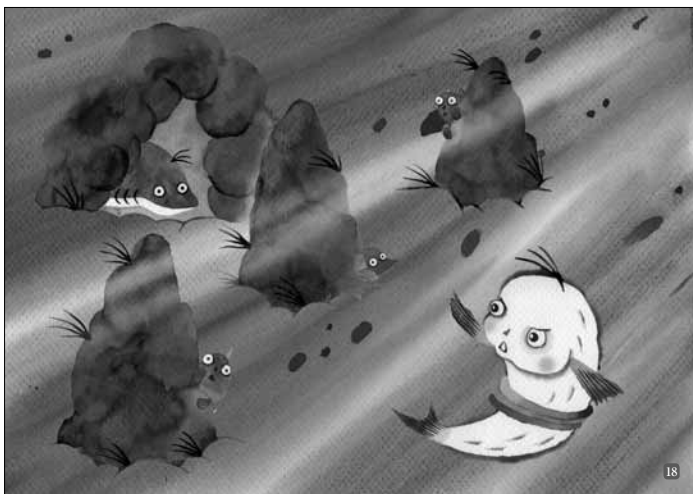
たくさんさかなの魚たちが
なきそうになりながら
白い魚しろ さかな いに言いました。

おびえるように

ぼうぜんとしながら

助けを こころよくに





18

しろさかな
白い魚

「とにかく ぼくに ついてきて」

しろさかな
白い魚は そう言っ

て
ほかの魚たちを

自分^{じぶん}が 知^しっている

かくれがに あんない しました。

しろさかな
白い魚は

あちこちに

小さな岩^{いわ}かげや

大きな ほらあなを

たくさん

知^しっていたので

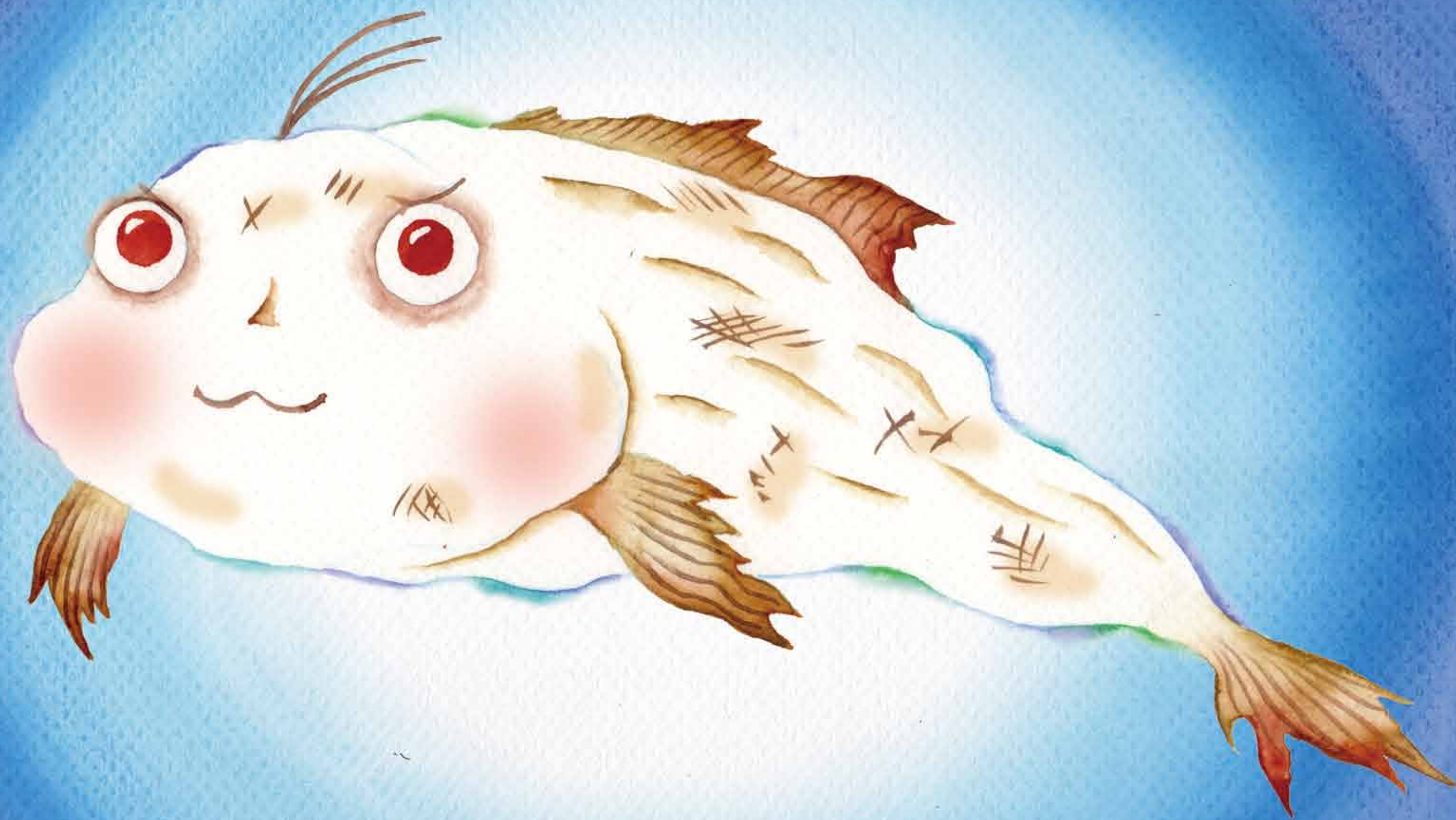
ぜんぶ^{ぜんぶ}の魚たちを

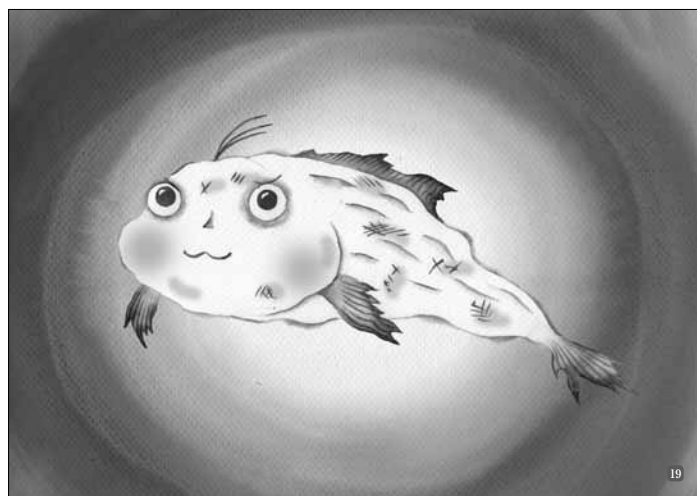
安全^{あんぜん}な場所^{ばしょ}に

つれて行くことができました。

実演^{じゆえん}ノート

たのみになる感^{かん}じで





いったい
どれくらい泳ぎつづけたでしょう。

白い魚は

すなにもまれながら
岩にぶつかりながら
たくさんの魚たちを
助けました。

白い魚の体は
きずだらけでした。

泳ぎつかれて
クタクタでした。

でも
心は
つかれていませんでした。

魚たちのことを助けた白い魚は、泳ぎ疲れてクタクタになりましたが、心は疲れていなかったとあります。
それは、なぜだと思いますか？

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！

かいとうれい
回答例

みんなを助けることができ「よかった」という
充実感でいっぱいだったから。
かくれてばかりの自分ではなくなったから。





あらしが　すぎると
海のあちこちに
自分の子どもをさがす
親たちがいました。

自分の子どもを見つけた
親たちは
子どものぶじを　知って
ないて　よろこびました。

その中には
白い魚の親子のすがたもありました。

白い魚のお母さん

「こわかったでしょう。
あなたが
みんなを　助けたのね。
えらかったわね」

白い魚は　お母さんに
たくさん　たくさん
ほめられました。

ほかの魚の親たちからも
たくさんのお礼を
言われました。



そんな中
ひとりぼっちの魚がいました。

サメの子です。

サメの子

「ぼくの親は

すぐ ぼくをおこるし

なかなか 家にも帰ってこない。

だれも ぼくのことなんて

心配じゃないんだ…」

サメの子は とても

悲しそうでした。

それを聞いた白い魚は言いました。

白い魚

「それなら うちにおいでよ。

お母さん、いいでしょ?」

お母さんは えがおで
うなずきました。







22

白い魚しろ さかなの親子おやこに 親切しんせつにされた
サメの子こは
白い魚しろ さかなに 言いいました。

サメの子こ

「ぼくは 君きみが
いじめられているのを
本当ほんとうは 知しっていたんだ…。

知らんぷりして
ごめんなさい。
本当ほんとうに ごめんなさい」

白い魚しろ さかな

「もう あやまらないで。
もし また だれかが
いじめられていたら
今度は いっしょに
その子こを 助たすけてあげようね」

サメの子こは 大きおおく うなずき
白い魚しろ さかなと サメの子こは
とても なかよくなりました。

もし、みなさんがサメの子こだったら、
いじめられている白い魚しろ さかなを助たすけようと思おもいますか？
それはどうですか？

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！

かいとうれい
回答例

助たすける→かわいそうだから。いじめはよくないから。
助たすけない→面倒めんどうだから。自分じぶんもいじめられるように
なるかもしれないから。

ポイント

実演じつえんノート

言いい出だしにくく感かんじで

心こころから反省はんせいする感かんじで

優やさしい声こえで

いずれの場合ばあいでも、
「いじめ」に気きづいた人ひとは、
先生せんせいや親おやに報ほう告こくするように
伝つたえましょう。





次の日。
白い魚とサメの子が
いっしょに泳いでいると
あらしの日に助けてもらった魚たちが
次々に集まってきました。

話し
話じようずな魚

「ぼくたちは
君を いじめていたのに
君は
ぼくたちを 助けてくれた。
ぼくは
自分のことが はずかしいよ」

カラフルな魚

「わたしも
ちかよらないでなんて言っ
て
本当に ごめんなさい」

遠くに行っていた
サメのお母さんも
サメの子を むかえにきて
言いました。

サメのお母さん

「うちの子を 助けてくれて
本当に ありがとう」

この日から
白い魚を いじめる魚は
いなくなりました。

言じうひんぐに

心から反省する感じで

心からの感謝の気持ちをいめて





たくさんの
なかまができた 白い魚は
お母さんに 言いました。

白い魚

「ぼくは『自分らしさ』が
何なのか
今も よくわからない。

でもね
わかったこともあるんだ。

ゆうきと やさしさを持つと
とても気持ちがいいし
たくさんの
なかまもできるってこと」

お母さんはうれしそうに
言いました。

白い魚のお母さん

「あなたの場合は
その『やさしさ』や
ほかの魚を『思いやれる心』が
自分らしさなのよ」





あらしの前まえは
同じ魚おな さかなだけで むれを作りつく
泳およいでいましたが
今いまでは いろいさかなろな魚が なかよく
いっしょに 泳およいでいます。

そして 海うみは
前まえよりも ずーっと
美うつくしくなりました。

ほうせきばこの ように
キラキラと かがやく 海うみを
リュウも うれしそうに
空そらから ながめていました。

（おわり）

よ
読んだあとに
かんが
考えよう！

かいとうれい
回答例

いじめのない海うみになったから。
みんなが仲なかよくなったから。

海うみが前まえよりもずっと美うつくしくなったのは
なぜだと思おもいますか？